
地デジ移行

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地デジ移行

【Nコード】
N1775V

【作者名】
氷純

【あらすじ】
色々と寂しいですね。

昼もだいぶ過ぎた頃によく俺は目が覚めた。

寝ぼけ眼でテレビを点けてみると青い画面に字が踊っている。

「そうか、今日だったか」

アナログからデジタルに変わったのだ。地デジ対応してないから使い物にならなくなったか。

俺はため息を付いて電源を切ろうとリモコンに手を伸ばす。

その時、テレビが砂嵐を起こしたと思うと女の顔が映った。

どこかで見たような気がする。どこにでもいる気がする。そんな平凡な顔。

「なんとか48？」

選挙だかをやっているアイドルグループだ。詳しくは知らないが……。

「地デジ対応して無いじゃないですか!？」

「うわっ!」

いきなり女に叱られたので情けなく悲鳴を上げてしまう。

おおかた、地デジ対応を促すためのCMだろう。なんて質の悪い。

お茶の間の爺婆の心臓を労れてんだ。

いや、待てよ。地デジ移行が済んだのだから電波は止まっているはず。

「何で映ってんだ？」

「乗る電波を間違えたからですよ」

電波？ 本物の電波さんか。

本物の電波さんは困ったように口を開く。

「今から乗る電波を変えようにも一度、電波塔まで行かないとだし。選挙で負けたらどうしてくれるんですかつ!」

むちゃくちゃだ。責められる謂われはない。地デジ対応をしてないのは俺の勝手だ。

「全く、取り敢えずテレビから出ないと、よつと!」

「ぎゃあー!」

なんか出てきた! リ。グの貞。さんみたいに出てきた!?

「ふう。それじゃあ私はこれで。出来れば投票してくださいねえ」
手を軽く振って部屋を出て行った。

流石に驚いたがこういう事もあるだろう。

俺は落ち着いてリモコンに手を伸ばす。

「ん?」

画面に男が映っていた。

この見慣れたサングラスの男は……。

「最後に乗りたくなつてね。いろいろ思い出もあるからさ」

…… 乗り納めらしい。

俺は無言で電源を切った。

どういう原理かテレビの中で悲鳴が上がる。「出れないって!

出してよ!」なんて声も無視。

素早く身仕度を整えて俺はアイドルを追いかけるべく部屋を後にした。

（後書き）

家のテレビが晴れて使い物にならなくなりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1775v/>

地デジ移行

2011年10月9日10時30分発行